

ポローニア

paulownia



絵：黒姫高原共同生活のしおりの表紙から（附属大塚特別支援学校小学部 6 年・中学部 2 年共同制作）

目次

教育局次長挨拶

巻頭言「文京校舎ロビーの二つの情景…「黒姫共同合宿」 結団式の写真から」◆甲斐雄一郎	2
「黒姫高原共同生活」を振り返って◆下山直人	2
『黒姫高原共同生活』の紹介◆運営委員会・実行委員会	3
「桐陰会館」完成報告会 一記念講演「附属と 嘉納治五郎先生、その教え子達」一◆小山 浩	4
桐陰会館完成祝賀ホームカミングデー(HCD)◆小山 浩	4
早く大学生になりたいな◆鷺見辰美	5
附属久里浜特別支援学校幼稚部保護者 主催の夏祭りを開催しました◆工藤久美	5
PTA行事「夏祭り」の開催◆日高雄之	5

ブリティッシュコロンビア大学(UBC)研修について ◆曾根典夫	6
国際フィールドワークinフィリピン◆今野良祐	6
日本サーモロジー学会を開催◆和田恒彦	7
第64回関東聾学校バレーボール大会優勝！ ◆苦瓜道代	7
附属学校教育局主催「公開教員研修会」 附属学校研究発表会	8





YUICHIRO
KAWAI

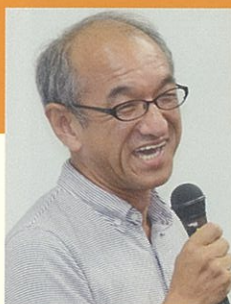
文京校舎ロビーの二つの情景… 「黒姫共同合宿」結団式の写真から

附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎

古今東西のファンタジー作品の傑作の一つとしてフィリパ・ピアスの「トムは真夜中の庭で」を挙げる方は多いでしょう。事情で伯母の家に預けられ孤独を憂えていたトムが、まさにその家を去ろうとする時、誰からも鬱陶しがられている家主のパーソロミュー老婦人が、実は滞在中かけがえのない友だちとなっていた同世代の少女・ハティその人なのだと気づき抱擁し合うという物語です。この、時の往還の奇跡を媒介した場所はパーソロミュー家の「ただの裏庭」でした。ところが広間の大時計が深夜13時(!)を鳴らすとそこは美しい庭へと変貌し、トムはやはり孤独なハティと出会い大切な時間を共有してきたのです。

そうした異界体験を経て、トムは現実の奥にもう一つの世界が読み取れるようになったというわけですが、現実世界で私たちがこういう局面に際会することはめったにないはずです。しかし何だか似ているぞ、という発見ならばまれにはあるようです。最近ではこの夏実施された「黒姫共同生活」の写真のうち、結団式の一葉を見た時の印象がそれに近いものでした。場所は通称「キノコの広場」と呼ばれる本学文京校舎のロビーです。普段は静かな場所ですが、結団式の一瞬を切り取ったその写真の奥からは、子どもたちの弾けるような笑い声や、期待と責任感とで心拍数の上がった少年少女の息づかいが聞こえてくるようでした。

トムの物語が裏庭と人生に寄せるピアスの思いの深さの所産だったとしたならば、通常は静謐な空間としてのロビーを結団式の会場として企画し、それを熱気に満ちた異界として実現した方々にはこの行事に寄せる、ピアスと同質の思いの深さと構想力があっただけでしょう。そしてその方々のおかげで体験が間接にとどまる者もまた、警備の方と挨拶をしつつロビーを通過する朝の一瞬に、目に写るものとは少し異なる情景を思い浮かべて日常を彩ることができるようになりました。



「黒姫高原共同生活」 を振り返って

黒姫高原共同生活引率団団長
(附属学校教育局 教授) 下山直人

この夏(2015年7月28～30日)、筑波大学附属の児童生徒が黒姫高原で共同生活を行いました。附属中学校、高等学校、駒場高等学校、坂戸高等学校、そして附属聴覚、大塚、桐が丘特別支援学校から、9歳～18歳の53名が参加しました。

筑波大学の附属学校は、いろいろな人が力を合わせて作るこれからの社会で、グローバルに活躍する人の育成を目指しています。そのため、これまでも学校間で、お互いの理解を深め、支えあうことの大切さを学ぶ交流活動を行ってきました。今後は、全附属学校の人や資源をフルに活用し、こうした交流活動をパワーアップしようと考えています。その第一弾として、今夏の共同生活が計画されました。

黒姫高原に立つと眠っていた感覚が目覚めようような気がします。黒姫の自然を満喫し、寝食を共にしながら行った今夏のプログラムは次のとおりです。

<1日目> 期待と不安を抱え東京を出発→バスレクで打ち解けムードに→黒姫ライジングサンホテルで開校式・同室の仲間と館内オリエンテーション→小雨降る中の火



おこしで野外炊飯

<2日目> 関西弁バージョンでラジオ体操→高原牛乳を使ったアイスクリームづくり→嗅いで、触って、味わった黒姫の森アドベンチャー→童話館見学→小枝や木の実を使ったお土産づくりで才能(?)発揮→火の神・火の子登場、盛り上がったキャンプファイヤー

<3日目> 津軽弁バージョンでラジオ体操→ナウマンゾウの骨に触れた博物館見学→お世話になったホテルのスタッフにお礼→バス内で思い出発表→東京で閉校式
生徒実行委員会が企画を練り進行をリードしてくれました。もの作りではたくさんの協力が生まれました。キャンプファイヤーで演奏された中学生のリコーダー「カノン」の美しさが耳に残っています。異なる感じ方や考え方に触れ、新鮮な経験と感動いっぱいの3日間でした。

黒姫高原共同生活の紹介

題字：稲垣温人（附属大塚特別支援学校）

運営委員会（教職員）
実行委員会（児童・生徒）



黒姫高原共同生活一行（児童・生徒53名、引率34名）の大自然と優しい心に抱かれた3日間を画像で紹介します。

初日のメイン企画は『野外炊飯』。ブヨと戦いながら小雨の中で決行。食材は豚肉・タ

マネギ・ニンジン・ジャガイモで、メニューはカレー・クリームシチュー・ポトフ・肉じゃがと実に多彩。

2日目は大塚特別支援の児童生徒がリードする『ラジオ体操』でスタート。午前の企画は『搾りたての牛乳を使ったアイスクリーム作り』、中村徹先生（前附属坂戸高校学校長、愛称



“村長”）と地元インストラクターによる『森のアドベンチャー』、聴覚特別支援の先生による手話を交えた『むかし話の鑑賞』。「もっと長く散策したかった」との声が。

午後の企画は、小枝や木の実をふんだんに使った『おみやげづくり』。完成したフォトフレームやブローチは個性豊かな名品揃い。12月に展示会を予定、乞うご期待。

夜の企画は、実行委員を中心に児童・生徒が趣向を凝らした『キャンプファイヤー』と『花火』（曇天で『星空観察』を断念。作成した名シナリオは来年度へ）。

最終日の企画は、『野尻湖ナウマンゾウ博物館見学』。学芸員の丁寧な説明に質問続出。直に歯の化石に触れて納得。そして、楽しいバスレクとともに帰路へ。夕刻、多くの保護者と職員の笑顔に迎えられ東京キャンパス文京校舎に帰還。互いに“掛け替えのない存在”であることを感じとって、3日間の共同生活の幕を下ろしました。



児童・生徒の感想

＜田口翔一（実行委員長）＞

“障害者”というもののいいイメージを持っていました。しかし、今回の黒姫はそんな心のバリアを払った気がします。ほとんどの人とは初めての出会いでしたが、楽しい思い出を作ることができ、いろんな人との交流は、新しい視点を学ばせかけとなりました。これから充実していく企画だと思うので、後輩諸君は期待してください。（駒場）

＜実行委員の感想＞

◇私にとって黒姫共同生活はハンデを持つ方々と本当の意味で共に生きていく社会について考える第一歩となりました。（中学）
◇予想していたような戸惑いや不便さはなく、本当に楽しい3日間だった。共生という言葉が心に強く残った。（高校）
◇企画はどれも楽しい思い出となり、協力の大切さ、障がいに応じた接し方を学ぶことができた貴重な3日間でした。（坂戸）
◇参加する前は不安でしたが、皆さんが親切に接して下さったおかげで楽しく過ごせました。手話を覚えてくれたり、使ってくれた人もいてとても嬉しかったです。（聴覚）

＜児童・生徒の感想＞

◇お兄さんとお姉さんとカレーライスとポトフを作りました。おいしかったです。（大塚小学部）／キャンプファイヤーが楽しかったです。初めてだったけど楽しかったです。（大塚中学部）
◇行く前は、大勢の人と関わることが不安でした。でも、様々な人と知り合い、共感・協力し合う喜びを感じました。これからも良い関係が続いていくことを心から願っています。（桐が丘）



引率団の感想

＜小林美智子（運営委員長）＞

5月19日の第1回運営委員会。少々緊張しながら開始を待った。

でも、時間通りに集まったのは数人。なんとなく締まらない…。学校により取組みへの温度差があり、ちぐはぐした意識のままイメージ通りに会が進められない。初めて一緒に仕事する人ばかりで気心が知れず、例年通りが通用せず、児童・生徒への指導法の違いから互いに遠慮があった。しかし、さすがは附属の教員。下見を終え会が進むにつれ協力体制が整い、生徒への成功体験や安全面での配慮など貴重な意見が多くなり実践へと進んだ。それは素敵な刺激と同時に貴重な知識の積み重ねとなった。今回の取組みは、11校の多様性を強く知る教員のインクルーシブ教育でもあった。（附属学校教育局特命補佐）

＜引率教員の感想＞

○同じ附属学校とは言ってもなかなか交流する機会もなく、今回のように3日間共に過ごすことになり、生徒達にとっては新しい発見がたくさんあったのではないかと思います。（聴覚）
○本当に充実した3日間で、11の附属学校を持っている筑波大学だからこそできる企画だと思いました。彼らが将来社会に出たときに、障害がある人もない人もこの共同生活くらい温かい社会であるといいなと思います。（大塚）
○駒場のFくんの「写真は表（おもて）の真ん中に貼るもの」という概念を覆すフォトフレーム。実はあれが、様々な感じ方や考え方を受け入れ認め合い、互いの壁を取り払う鍵を握っているのではないかと振り返る今日この頃です。（桐が丘）



「桐陰会館」完成報告会 —記念講演「附属と嘉納治五郎先生、 その教え子達」—

附属中学校 副校長 小山 浩



2014年10月、附属中学校の旧プール跡地に、同窓会のご尽力も得て、「桐陰会館」が完成しました。その完成報告会が12月17日に同会館で開催されました。その中で、本附属中学・高校の第3代校長嘉納治五郎先生(筑波大学の前身である高等師範学校の創始者)にまつわる記念講演を筑波大学体育専門学群長 真田 久教授にお願いいたしました。真田学群長は、筑波大学の代表として2020年の東京オリンピックパラリンピック教育に深く関わっておられます。その縁もあり表題にあるようなテーマで、嘉納治五郎先生と本校の関係についてお話いただきました。オリンピック招致に多くの本校卒業生が関わっていたことを知り、感激を新たにしました。

まず、幻の1940年東京五輪招致は嘉納治五郎先生の尽力が大であったことは周知のことです。これに杉村陽太郎氏(1901年高師附属中卒10回)がIOC委員として関わっていたことが紹介されました。

さらに、戦後の1964年東京五輪招致には平沢和重氏(1927年東京高師附属中卒36回)が深く関わっていたことが披露されました。彼は、返上となった1940年の東京五輪招致成功のIOC総会からの帰国途上にあった嘉納先生、その最期を氷川丸船上で看取っています。後にその時の想いを1964年の五輪招致演説の中で触れ、アジア初の五輪開催の価値を説いていた嘉納先生の夢にも言及し、後世に語り継がれる名演説であったということです。

そして、今回の2020年東京大会招致には、小倉和夫氏(1957年東京教育大附属高卒65回)が招致委員会事務総長として尽力されました。附属の幅広い人脈のなせる業と改めて感じます。

ご存知のように筑波大学は多くの競技者、メダリストを輩出しています。競技だけでなく、永田学長、石隈副学長をはじめ、多くの筑波大学の関係者や附属学校の関係者が見守り、支えていることを実感しています。2020東京五輪

が世界に誇れる大会になるよう、All Japanそして、All Fuzokuで盛り上げていきたいものです。



桐陰会館完成祝賀 ホームカミングデイ(HCD)

附属中学校 副校長 小山 浩

2015年度が新体制で始まって間もない春休み中の4月5日(日)、桐陰会館完成を祝い、ホームカミングデイが同窓会の方々のご尽力により開催されました。1,700名を越える来校者があったように聞いております。生憎の雨模様でしたが、多くの卒業生が母校に集まり、旧交を温め、さらに世代を超えて交流し、正に附属の伝統を感じる一日となりました。

まずオーケストラ部の奏楽でオープニングセレモニーが始まり、続いて同窓会会長のお話、副校長の挨拶、会館完成を祝う乾杯、記念写真撮影等が行われました。

続いて今回のホームカミングデイの目玉となる桐陰会歌斉唱が行われました。OB・OG諸氏の歌声が桐陰会館大講義室一杯に響き渡り、風格さを感じました。高校88回卒業の江上いずみさんが、統括責任者として八面六臂のご活躍で、会を盛り上げておられました。

その後、各種イベントが催されました。大講義室での遠藤律子さんのジャズコンサート、おやじバンド、コーラス、オペラ、現役高校生の楽器演奏、和室での茶道体験、会議室での医療相談コーナー等々。

また中学校教室を利用した憩いの場では、同級生との再会、育鳳館では現役生徒の高校桐陰祭・中学学芸発表会の優秀作品展示、鉄道模型の展示。体育館では籠球部、羽球部、送球部、グラウンドでは蹴球部による紅白戦や交流試合と、本当に盛りだくさんのHCDとなりました。

閉会は体育館でダンスグループのパフォーマンスや現役高校生のロープスキッピング演技等によりおおいに盛り上がり、素晴らしいエンディングでした。HCDを成功に導いた統括責任者の万感の思いがこもる涙がとても印象的でした。



桐陰会館完成記念

ホームカミングデイ

早く大学生になりたいな

附属小学校 教諭 鷺見辰美

「お兄さんやお姉さん、おもしろくてやさしい人ばかりだった」5年生の恒例となった筑波大学キャンパスツアーと筑波山登山遠足。その日の日記に書かれていた言葉だ。小学生にとって、とても楽しいそして夢をもてる一日になった。校長先生にいただいた一人一人の名前入りの入校証を胸にして、最初の緊張顔も一気にほぐれた。あちこちを見てみたい小学生は、まるで大学生を案内するかのように前々へと進んでいく。落ち着かせようとする大学生

のみなさんは、きっと大変だったと思う。

広いグラウンド、芸術作品であふれる部屋、講義室、附属の小学校に在籍しながら、ほとんどの子にとっては初めて見る大学キャンパスになる。次々に、引率の学生さんに質問をあげることになる。一つ一つ丁寧に答えてくれ、大学生生活に夢をもてるように話をしてくれた学生のみなさん、手はずを整えてくださったみなさん、ありがとうございました。



附属久里浜特別支援学校幼稚部 保護者主催の夏祭りを開催しました

附属久里浜特別支援学校 幼稚部主事

工藤久美

8月1日(土)、幼稚部保護者主催による第4回夏祭りを開催しました。夏祭りの当日は、幼稚部の幼児とその保護者、きょうだい、おじいちゃんおばあちゃん、叔父さん叔母さんの参加がありました。また、附属視覚特別支援学校幼稚部の教員や国立特別支援教育総合研究所の研究員、転任した幼稚部の教員も夏祭りに駆けつけ、夏祭りを盛り上げて下さいました。夏祭りの第1部は、校内でバルーンハウス、おみこし、かき氷、すいか割り、ヨーヨー、氷遊び、スライダー、的当て、ボールプール、オリエンテーリングを行いました。保護者の皆さん力作の手作り遊具に、子供も大人も目をきらきら輝かせて楽しみました。親子や家族との交流やきょうだい児同士が仲良く関わる様子も見られました。

第2部は、学校の運動場で花火大会を行いました。夏祭りの準備と開催を通して、保護者同士、保護者と教員、教員同士が協力することで、お互いを理解し合い、コミュニケーションを広げたり、深めたりすることができました。

すいか割り

花火



PTA行事「夏祭り」の開催

附属聴覚特別支援学校 幼稚部主事

日高雄之

「今年は屋外でやりたいな」幼稚部 PTA 行事「夏祭り」実行委員のお父様方と幼稚部教員の共通の願いでした。

7月18日(土)、夏祭り当日。模擬店やゲーム等、会場の準備を終え、16時の開始を待ちました。その間に小雨が降り始め、昨年度に引き続き屋外での実施を断念。大急ぎで屋内への会場変更作業を行い、何とか定刻通りに始めることができました。

子ども達のほとんどが、浴衣や甚兵衛姿の夏祭りらしい格好での参加でした。校舎内での模擬店・ゲーム、ホールでの盆踊りや御神輿と予定通りに進み、教室で軽食をとつ

た後、小雨の降る中、園庭での花火が始まりました。家庭で使用する物より少々規模の大きな打ち上げ花火に実行委員のお父様方が次々に点火し、最後の仕掛け花火ナイアガラが終わる頃にはすっかり暗くなっていました。

満足そうな表情をして帰って行く子ども達の姿が、実行委員のお父様方や教員

にとっての何より

のご褒美とな

りました。



ブリティッシュコロンビア大学(UBC)研修について

附属高等学校 教諭 曾根典夫

UBC研修とは、本校生23名に筑波大学の先生方が事前指導を行い、UBCで本校独自のプログラムが行われるものです。帰国後は成果報告会を本校で行いました。UBCには様々な地域から約70人の高校生が集まっており、本校生は2週間、同世代の高校生と同じ学生寮で生活を共にし、日中は講義やワークショップ、夜はそれぞれが思い思いの時間を過ごしていました。今後多くの生徒がこのプログラムに参加し、そこでの経験を学校で、地域で広めていってもらえることを期待したいと思います。最後にこのプログラムに関わられた多くの方々に感謝いたします。次の生徒の感想もお読みください。

今回参加したUBCプログラムでは、貴重な経験を積むことができた。特にUBCでの講義は、日本と異なり、ロールプレイングや、心理テスト、オンラインのビデオなどが多く活用されていて、印象に残った。例えば、ギリシャの経済危機について学んだ時は、自分達がドイツの首脳ならどう対処するかを考えるなど、実践的なロールプレイングをして、議論を深めることができた。また、多様な価値観を尊重する雰囲気を肌で感じ、大きな感銘を受けた。今回のプログラムを通して多くのことを学び、視野を広げることができた。(廣澤友恵)

高校2年生後半から3年生の夏にかけて、UBCプログラムに参加した。受験生の夏に2週間も海外に行くということは、学業が芳しくない私にとっては人生の大チャレンジであった。しかし、プログラムを修了した今の私の心は、カナダでの思い出、そして私を支えてくれた多くの人々に対する感謝の気持ちで満ち溢れている。学年を超えて附属の友達ができたこと。今でもメールをやり取りする外国の友達ができたこと。講義が面白かったこと。雄大な自然を満喫したこと。このプログラムを通して、素晴らしい仲間たちと、貴重な体験をすることができたことに感謝している。

(古賀結花)



国際フィールドワーク in フィリピン

附属坂戸高等学校 教諭 今野良祐



附属坂戸高等学校は、総合学科の特色を生かしたグローバル人材の育成を推進するため、平成26年度より文部科学省「スーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)」の指定を受けています。高校生ESD国際シンポジウムの開催やインドネシアでの3週間の国際フィールドワークなど、海外の高校生とともに学びあう取り組みを実践しています。

このフィールドワークでは、フィリピンに2週間滞在して、フィリピンに生起しているお米をめぐる諸問題、ごみ問題、健康問題などについて、交流校であるフィリピン大学附属高校の生徒とともにフィールドワークに出かけて課題解決に向けた国際協働学習に取り組みました。インドネシアでの実践に引き続きASEAN諸国の高校生とともに学びあう取り組みとして、今年から初めてフィリピンにて実施しました。滞在期間中は、フィールドワーク・課題研究の活動だけでなく、ホームステイや授業への参加、JICA(国際協力機構)フィリピン事務所への表敬訪問、アジアフードフェスティバルやサイエンスキャンプなどのイベントにも参加しました。

マニラ郊外にあるごみ処理場の見学およびごみ分別で生計を立てているスカベンジャーの方々にインタビュー調査をさせていただきました。劣悪な環境下で危険と隣り合わせの仕事にも関わらず、あまり献身的なサポートがない状態で働く方々の生の声を聴き、年々増えているごみ処理の現状やそこで働く方々の健康被害の状況などを改善するための手立てを考えました。専門用語などの言語の壁や広範にわたる知識量の不足、協働で取り組むむずかしさなど幾つもの課題がありますが、フィリピンの高校生とともに議論し、改善策を考え、その成果を地元の小学校において発表させていただくなど、充実した時間を過ごすことができました。生徒はフィリピンで学んだ知見と経験をふまえて、それぞれの卒業研究に向けて動き出しました。



日本サーモロジー学会を開催

理療科教員養成施設 准教授 和田恒彦



6月26日～28日に「日本サーモロジー学会第32回大会」(筑波大学共催)を宮本俊和理療科教員養成施設長を大会長に東京キャンパス文京校舎にて開催した。

日本サーモロジー学会は、サーモグラフィ及び温熱医科学研究の医学・生物ならびに関連する工学における発展を図ることを目的とした学会で、「Biomedical THERMOLOGY」誌を発行しており、学会員は医療系の有資格者をはじめとして、獣医、体育など様々な分野から構成されている。

理療(鍼・灸・あん摩マッサージ指圧)では、患者様の状態把握や治療効果の確認に古来より皮膚温の変化を指標にしてきた。

赤外線サーモグラフィは1968年にわが国に導入されたが、本施設は1970年より赤外線サーモグラフィによる研究を行っており、医用サーモグラフィのテキストにも「東洋医学とサーモグラフィ」の項目があるなど、サーモグラフィ研究に貢献してきた。

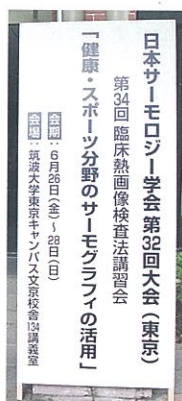
学会は、大会長講演、教育講演、特別講演、シンポジウム、一般演題が行われた。

大会長講演は「筑波大学理療科教員養成施設におけるサーモグラフィ研究の歩み」について、教育講演は「サーモグラフィを用いた鍼灸領域の研究」、特別講演は「ジャンパー膝のサーモ

グラフィによる評価」、シンポジウムは「スポーツ・健康分野におけるサーモグラフィの活用」をテーマに行われた。一般演題は、マッサージ刺激による皮膚温の変化や、感染制御のための発熱判定基準に関するもの、スマートフォン用サーマルカメラ、理療科教員養成施設におけるサーモグラフィ教育など多彩な内容について発表があった。

また、第34回臨床熱画像検査法講習会も同時に開催され、サーモグラフィによる熱画像検査技術と応用について教育指導が行われた。

昼休み時間に、サーモグラフィの撮影を行う恒温恒湿室や理療臨床部の鍼灸施術所、実技実習室、点字印刷設備など、理療科教員養成施設の施設見学を行い好評を博した。



第64回 関東聾学校バレーボール大会優勝!

附属聴覚特別支援学校 教諭 苦瓜道代

関東聾学校バレーボール大会は、在籍生徒数の少ない学校も参加できるよう、高等部の大会には中学部の生徒も参加できるという特別なルールがあります。また、全国聾学校バレーボール大会はないため、関東の聾学校に在籍するバレーボール部員が参加する最も大きな大会であり、どのチームも関東聾学校バレーボール大会の勝利を目標としています。

今年度は、7月22日(水)～24日(金)に、神奈川県立体育センターで第64回関東聾学校バレーボール大会が行われました。予選リーグでは、昨年度の優勝校である東京都立中央ろう学校と東京都立葛飾ろう学校と対戦しました。終始自分たちのペースで試合を運ぶことができ、ともにストレートで勝ち、決勝トーナメント(準決勝)進出を決めました。準決勝では、ここ数年、練習試合でもなかなか勝つことのできなかった千葉県立千葉聾学校と対戦しました。予想通り、苦しい展開となりましたが、何とかフルセットで勝つことができました。決勝では、中学生エースとセッターのコンビプレーで勢い良く勝ち進んだ神奈川県立平塚ろう学校と対戦しました。1セット目を取られ、準決勝同様、苦しい展開となりましたが、粘りのあるプレーを見せ、21年ぶりに優勝することができました。

ここ数年は、なかなか接戦を物にすることができず、一昨年度は予選リーグ敗退、昨年度は決勝トーナメント1回戦敗退という結果でした。今回、優勝という結果を出せたのは、実際の試合を想定しながら練習してきたという自信、苦しいときに助け合える仲間が存在があったからだと思います。これからも、個人・チームの課題を克服できるよう、チーム一丸となって練習に励んでいきたいと思っています。



平成27年度 筑波大学附属学校教育局 主催 「公開教員研修会」

平成27年度筑波大学附属学校教育局主催「公開教員研修会」を、次の要領で開催いたします。

1.日 時:平成28年 2月27日(土) 10:00~12:10^{予定}

2.場 所:筑波大学附属中学校育鳳館(東京都文京区大塚1-9-1)

3.プログラム

「司会」附属学校教育局 教授 江口勇治

開会の辞……附属学校教育局 教授 江口勇治

教育長挨拶……附属学校教育局 教育長 石隈利紀

講 演……「薄氷の上の幸福感～若者の生活満足度を問う～」
人文社会系 教授 土井隆義
講演後質疑応答

発 表……附属視覚特別支援学校生徒による
タイ王国の盲学校生徒との交流

閉会の辞……附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎

4.参加費 無料

5.申込締切 平成28年 2月15日(土)

申し込み・お問い合わせ先

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学東京キャンパス事務部 学校支援課 教職員・学事担当
TEL:03-3942-6809 FAX:03-3942-6911

平成27年度 筑波大学附属学校研究発表会

附属学校教育局では、平成27年度研究発表会を次の要領で開催いたします。本学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆様方にご理解をいただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

日 時:平成28年 2月27日(土) 13:10~17:10^{予定}

場 所:筑波大学附属中学校育鳳館(東京都文京区大塚1-9-1)

詳細については、今後、附属学校教育局ホームページ
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/> にアップします。
ご確認ください。

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia
vol.34

発行日……平成27(2015)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印 刷……広研印刷 使用紙:U-Itimax [日本製紙]

